



ラスト・スパート

祭り前日は広場でちようちんを吊るす木枠の設営です。午前10時にはすでに高く昇った夏の太陽のもとドリルやかなづちを持った学生たちが汗を垂らしながら頑張ります。学生たちはこの日、夕方まで広場で作業をし、さらに大学で残りの作業を遅くまで行いました。

晴天に恵まれ

そしていよいよ開催当日。晴天に恵まれたこの日も、朝からちようちんの取り付け作業です。ちようちんはすべて作った人に返されるため壊さないよう気を使いながらひとつひとつ取り付けられます。さらに全体の配置を間違えないよう図面を見ながら走り回り指示を出すのは工藤さん。父母らの手伝いもあり、なん

とか間に合いました。

こうして迎えた開始時刻の午後3時。大勢の参加者がぞくぞくと詰め掛けます。あとは点灯時刻の6時半を待つばかり。

会場には、その場でちようちんを作ることができるといって、いろいろな団体の出店が建ち並び、焼き鳥などの食欲をそそる香りが立ち込めていました。また、会場の一角には区内の児童会館が協力してゲームなどができるコーナー。さらに会場に隣接する前田児童会館内には「手稲前田からくり城」と題した巨大迷路が設けられ、子どもたちは「あれ、また行き止まりだ。おかしいなあ」などと真剣な表情でチャレンジしていました。

日が暮れると

いよいよ、ちようちん点灯の6時半。学生たちが手際よ

く点灯していきます。次第に薄暗くなる会場に華やかで、清楚な明かりが灯ります。自分で作ったちようちんを見つけた子どもは、ふんわりとしたその明かりを飽きることもなく見つめていました。

午後8時。幻想的な時間と空間の舞台となったといね夏あかりもそろそろ終わりに。ろうそくが燃え尽きたちようちんから、ぼつり、ぼつり、と明かりが消えていきました。

祭りを終えて

消灯後、ちようちんの数が過去最高だった昨年の6千400個を大きく上回る7千200個だったことが実行委員から発表されると学生たちから大きな歓声が上がりました。工藤さんと同じゼミで準備に携わった3年生たちは「最初は何をすればよいか分からず、大変な時もありましたが、当日を楽しみにしていたので、苦に

はなりませんでした」、「準備が大変で、間に合うのか不安になりましたが、何とか終了しました。点灯した時の感動は忘れられませんね」と興奮冷めやらぬ表情で感想を話してくれました。

そして自身最後となる夏あかりを終えた工藤さんは、「ちようちんや出店も増え、とても盛り上がったと思います。忙しくて曜日もわからない日々が続きましたが、4年生としての責任を感じながら頑張ったかがありました。終わってしまった今は少し寂しいかな」と話し、「来年も絶対見に来たい」と笑顔を見せてくれました。

彼らが得た今回の経験と喜びが、また来年後輩たちに伝えられ、祭りを作り上げる大きな原動力の一つとなるでしょう。多くの人に感動を与えた祭りが幕を閉じました。